

表2-43 親への頼みはたいがい認められる

×「子どものウェルビーイング」の一元配置分散分析

分散分析.

WELL					
	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	1122.972	2	561.486	6.066	.006
グループ内	2684.528	29	92.570		
合計	3807.500	31			

⑧ 私の家族は、一人一人が自由な生き方をしている

本調査対象者のうち、私の家族は、一人一人が自由な生き方をしているにとてもよくあてはまると回答している子どもたちは8.6%であった。また、まあまああてはまると回答している子どもが25.7%、あまりあてはまらないと回答している子どもが233名(48.6%)、全くあてはまらないと回答している子どもたちが17.1%であった(表2-44)。

表2-44 私の家族は、一人一人が自由な生き方をしている

		度数	有効パーセント
有効	全然あてはまらない	6	17.1
	あまりあてはまらない	17	48.6
	まあまああてはまる	9	25.7
	たいへんよくあてはまる	3	8.6
合計		35	100.0

それぞれの群における「子どものウェルビーイング」平均点は、自分の家族は、一人一人が自由な生き方をしていると全く感じていない子どもたちの「子どものウェルビーイング」得点が一番高く、一人一人が自由な生き方をしていると強く感じている群での「子どものウェルビーイング」得点が一番低かった(表2-45)。

表2-45 私の家族は、一人一人が自由な生き方をしている

別「子どものウェルビーイング」得点

## 記述統計量

WELL

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	最小値	最大値
全然あてはまらない	6	91.667	10.893	4.447	74.0	107.0
あまりあてはまらない	16	88.313	11.487	2.872	70.0	102.0
まあまああてはまる	8	88.625	5.927	2.095	79.0	96.0
たいへんよくあてはまる	3	72.333	16.258	9.387	58.0	90.0
合計	33	87.545	11.405	1.985	58.0	107.0

この群の間の「子どものウェルビーイング」得点の差が、統計的に有意な差であるかを調べるために、一元配置分散分析を行なった。その結果、統計的に有意な差であることは認められなかった（表2-46）。

表2-46 私の家族は、一人一人が自由な生き方をしている

×「子どものウェルビーイング」の一元配置分散分析

分散分析.

WELL

	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
グループ間	814.869	3	271.623	2.353	.093
グループ内	3347.312	29	115.425		
合計	4162.182	32			

## ⑨ 家族の用事より、自分の用事を優先する

本調査対象者のうち、家族の用事より、自分の用事を優先すると回答している子どもたちは17.1%であった。また、どちらかと言えば家族の用事より、自分の用事を優先すると回答している子どもが51.4%、自分の用事より、家族の用事を優先すると回答している子どもが2.9%、どちらかと言えば自分の用事より、家族の用事を優先すると回答している子どもたちが28.6%であった（表2-47）。

表2-47 家族の用事より、自分の用事を優先する

	度数	パーセント
有効		
全然あてはまらない	1	2.9
あまりあてはまらない	10	28.6
まあまああてはまる	18	51.4
たいへんよくあてはまる	6	17.1
合計	35	100.0

それぞれの群における「子どものウェルビーイング」平均点は、極端に自分の用事より家族の用事を優先する、または家族の用事よりも自分の用事を優先すると回答している子どもの「子どものウェルビーイング」得点が低かった(表2-48)。

表2-48 家族の用事より、自分の用事を優先する

別「子どものウェルビーイング」得点

記述統計量

WELL						
	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	最小値	最大値
全然あてはまらない	1	58.000			58.0	58.0
あまりあてはまらない	9	91.556	6.858	2.286	84.0	107.0
まあまああてはまる	17	89.824	10.766	2.611	70.0	102.0
たいへんよくあてはまる	6	80.000	9.839	4.017	69.0	91.0
合計	33	87.545	11.405	1.985	58.0	107.0

この群の間の「子どものウェルビーイング」得点の差が、統計的に有意な差であるかを調べるために、一元配置分散分析を行なった。その結果、統計的に有意な差であることが認められた(表2-49)。

表2-49 家族の用事より、自分の用事を優先する

×「子どものウェルビーイング」の一元配置分散分析

分散分析.

WELL					
	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	1447.489	3	482.496	5.154	.006
グループ内	2714.693	29	93.610		
合計	4162.182	32			

### (3) 家族の関係性と「子どものウェルビーイング」

家族の関係性については、家族の情緒的関係に対する認識尺度得点を用いて、「子どものウェルビーイング」との関連性を調べた。この尺度は、8項目からなる加算尺度であるため、ここでは項目別回答結果の度数分布を示し、その後

「家族の情緒的関係に対する認識」尺度の得点分布結果について触れる。そして、最後に「家族の情緒的関係に対する認識」と「子どものウェルビーイング」の関連性について検証することとする。

表 2-50 「家族の情緒的関係に対する認識」 8 項目の度数

① コミュニケーション：家で家族とよく話し合う

		度数	有効パーセント
有効	全然あてはまらない	4	11.4
	あまりあてはまらない	10	28.6
	まあまああてはまる	15	42.9
	たいへんよくあてはまる	6	17.1
	合計	35	100.0

② 配慮：家族はあなたのことを気にかけてくれる

		度数	有効パーセント
有効	全然あてはまらない	1	2.9
	あまりあてはまらない	7	20.0
	まあまああてはまる	24	68.6
	たいへんよくあてはまる	3	8.6
	合計	35	100.0

③ 信頼：家族の中であなたは信頼されている

		度数	有効パーセント
有効	全然あてはまらない	3	8.6
	あまりあてはまらない	16	45.7
	まあまああてはまる	15	42.9
	たいへんよくあてはまる	1	2.9
	合計	35	100.0

④受容：家族はそのままのあなたを受け入れてくれている

		度数	有効パーセント
有効	全然あてはまらない	7	20.0
	あまりあてはまらない	23	65.7
	まあまああてはまる	2	5.7
	たいへんよくあてはまる	3	8.6
	合計	35	100.0

⑤理解：家族はあなたのことを理解してくれている

		度数	有効パーセント
有効	全然あてはまらない	4	11.4
	あまりあてはまらない	13	37.1
	まあまああてはまる	17	48.6
	たいへんよくあてはまる	1	2.9
	合計	35	100.0

⑥愛情：家族に愛されていると感じている

		度数	有効パーセント
有効	全然あてはまらない	5	14.3
	あまりあてはまらない	12	34.3
	まあまああてはまる	15	42.9
	たいへんよくあてはまる	3	8.6
	合計	35	100.0

⑦子ども本位：家族は、あなたが中心である

		度数	有効パーセント
有効	全然あてはまらない	3	8.6
	あまりあてはまらない	11	31.4
	まあまああてはまる	18	51.4
	たいへんよくあてはまる	3	8.6
	合計	35	100.0

⑧尊重：家族で何かを決めるとき、あなたの意見を聞いてくれる

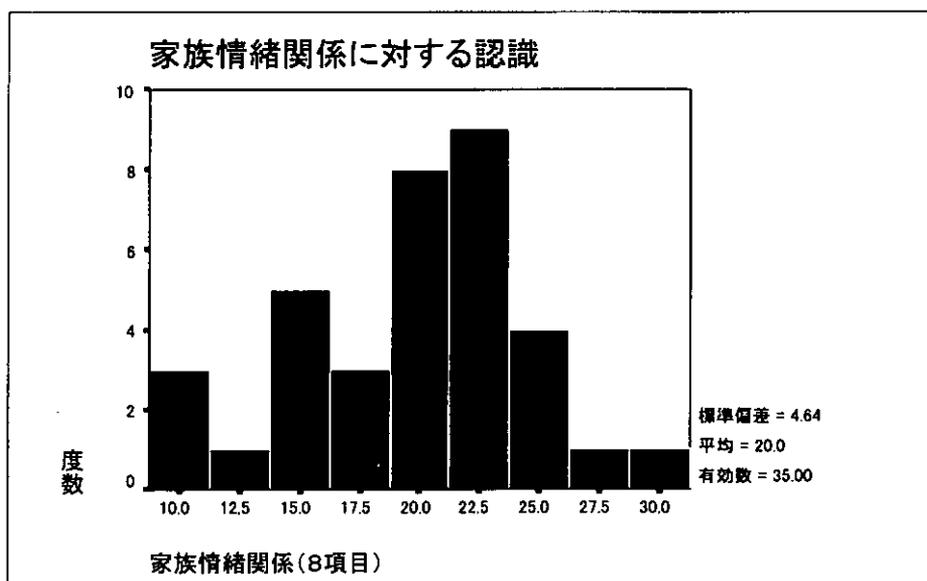
		度数	有効パーセント
有効	全然あてはまらない	5	14.3
	あまりあてはまらない	9	25.7
	まあまああてはまる	17	48.6
	たいへんよくあてはまる	4	11.4
合計		35	100.0

次に、8項目の加算尺度の統計量及びヒストグラムを以下に示す。

統計量

家族情緒関係(8項目):q41-48

度数	有効	35
平均値		19.97
標準偏差		4.64
分散		21.56
最小値		10
最大値		29



次に、「家族の情緒的関係に対する認識」と「子どものウェルビーイング」との関連性を調べるために、「家族の情緒的関係に対する認識」と「子どものウェルビーイング」の相関係数を算出した（表2-51）。

表2-51 「家族の情緒的関係に対する認識」と  
「子どものウェルビーイング」の相関係数

		相関係数	
		「子どものウェルビーイング」	家族情緒関係
「子どものウェルビーイング」	Pearson の相関係数	1.000	.381*
	有意確率(両側)	.	.029
	N	35	35
家族情緒関係	Pearson の相関係数	.381*	1.000
	有意確率(両側)	.029	.
	N	35	35

\*. 相関係数は5%水準で有意(両側)です。

ピアソンの相関係数が0.389であり、「家族の情緒的関係に対する認識」と「子どものウェルビーイング」の間には、正の相関が見られた。つまり、「家族の情緒的関係に対する認識」が肯定的なものであるほど、「子どものウェルビーイング」得点が高まることが明らかとなった。

#### (4) 居場所と「子どものウェルビーイング」

子どもたちが楽しい、居心地がよいと感じている場所と「子どものウェルビーイング」の関連性については、学校、家庭、習い事の教室の順に「子どものウェルビーイング」得点が高い結果となった（表2-52）。

表2-52 居場所別「子どものウェルビーイング」得点

記述統計量						
WELL						
	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	最小値	最大値
学校	13	92.462	6.948	1.927	84.0	102.0
家庭	11	89.818	11.470	3.458	71.0	107.0
学習塾	3	70.000	10.583	6.110	58.0	78.0
習い事の教室	2	80.000	14.142	10.000	70.0	90.0
楽しい場所はない	3	79.333	10.504	6.064	69.0	90.0
合計	32	87.438	11.570	2.045	58.0	107.0

この結果の統計的意味を検定するために、一元配置分散分析を行なった。その結果は、表2-53である。つまり子どもたちが居場所として居心地がよい、楽しいと感じている場所と「子どものウェルビーイング」に関連性が認められた。

表2-53 居場所×「子どものウェルビーイング」の一元配置分散分析

分散分析					
WELL					
	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
グループ間	1610.341	4	402.585	4.280	.008
グループ内	2539.534	27	94.057		
合計	4149.875	31			

### III 研究結果のまとめと今後の課題

本研究では、里親に委託されている子どもの「ウェルビーイング」とそれを規定する諸要因について、家族の視点から調査を行なった。以前同じ分析枠組みを用いて一般家庭の中学生を対象に行なった調査研究では、現実の家族生活と家族との情緒的な関係性が、キー概念となった(木村・畠中2002、木村・畠中2002)。しかし、今回の里親過程に委託されている中学生に対して行なった調査では、キー概念と言えるほど明確な結果が出なかった。中でも、家族生活に関しては、ほとんどの項目において統計的に有意な差を認めることができなかった。

この要因として、第一に、今回の調査研究では、里親委託されている中学生のデータが40ケースと少なく、4件法の回答選択肢のうち1選択項目において5サンプルをきる場合が多く出てくることが挙げられる。また、第二の要因として、調査項目に里親委託された年数を問う質問を設定しなかったため、里親に委託されている年月を統制した分析を行なうことができなかったことが挙げられる。

したがって、今後の課題として、データのサンプル数を増やすこと、また質問紙調査と同時にヒアリング調査を実施することによって、個別ケースの差を埋め、里親委託されている子どもたちの「ウェルビーイング」を実現するための諸要因について、より実践的な視点から言及することができると考える。

#### 参考文献

畠中宗一、2000、『子ども家族支援の社会学』世界思想社

- 木村直子、2002、「中学生の無気力とこれを規定する諸要因に関する研究」『現代の社会病理』17:63-75
- 木村直子・畠中宗一、2003、「母親の就労・非就労が「子どものウェルビーイング」に及ぼす影響」『現代の社会病理』18:78-93
- 木村直子・畠中宗一、2003、「家族生活の充実と家族の情緒的関係に対する肯定的認識が中学生の「ウェルビーイング」に及ぼす影響」『家族関係学』日本家政学会家族関係学部会編:45-57
- Magura S., B.S. Moses, Outcome Measures for Child Welfare Services ; Child Well-being Scales and Rating Form., Child Welfare League of America , 26
- 増田光吉、1974「親子のコミュニケーションと家庭の雰囲気」姫岡勤、上子武次、増田光吉『現代のしつけと親子関係』川島書店、75-94
- 明治学院大学立法研究会編、1996、『子どもの権利 子どもの権利条約を深めるために』、信山社
- 松田宣子、1999、「児童 QOL 評価の開発に関する研究—WHOQOL100(成人版)に基づき作成した児童版評価を用いて」『小児保健研究』58(4):350-35
- 中山健夫、2002、「主観的良好状態評価一覧 (General Well-Being Schedule:GWBS) 日本語版の開発」『厚生指標』49(3):8-18
- 西田裕紀子、2000、「成人女性の多様なライフスタイルと心理的 Well-Being に関する研究」『教育心理学研究』48(4):433-443
- 西沢悟、1996、The Religiousness and Subjective Well-Being of Japanese Students: Rationale of the Psychic Well-Being Scale『学園論集』90:55-79
- 清水哲郎、1998「〈QOL〉概念の明確化と医療への適用」、『行動計量』、第25巻第2号、:72-75
- 高橋重宏、1994、『ウェルフェアからウェルビーイングへ』川島書店
- 田崎美耶子・野地有子・中根允文、1955、「WHO の QOL」『診断と治療』83(12):2183-2197
- 上田厚・上田公代、「子どもの発育環境と QOL」、41(12):2129-2137
- 山根常男、1998、『家族と社会 社会生態学の理論をめぐって』、家政教育社
- WHO:オタワ憲章、島内憲夫訳、『ヘルスプロモーション』、1990、垣内出版株式会社

研究成果の刊行に関する一覧表

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
木村直子・ 畠中宗一	母親の就労・非就労が「子どものウェルビーイング」に及ぼす影響	日本社会病理学会	現代の社会病理			2003	78-93
木村直子・ 畠中宗一	家族生活の充実と家族の情緒的関係に対する肯定的認識が中学生の「ウェルビーイング」に及ぼす影響	日本家政学会家族関係学部会	家族関係学			2003	45-57

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年